奈良教育大学広報誌

Nara University of Education
SUMMER 2010

なりわま

巻頭特集

学長対談

長友恒人 学長 × 鷲山恭彦 奈良教育大学理事

◆ 幅広い知識と経験を　～特色あるプログラム～

新理数プログラム／食育リーダー養成プログラム
「地域と伝統文化」教育プログラム／海外留学プログラム

◆ 研究室紹介ラボ・レター

根來秀樹 准教授（学校教育講座）

奈良教育大学
イメージキャラクター
「なっきょん」

夏
2010

学長対談

奈良教育大学学長
長友 恒人

（独）大学評価・学位授与機構 客員教授
奈良教育大学理事（渉外・連携担当）
鷲山 恭彦

教員養成をめぐっては、折りしも6月、川端達夫文部科学大臣から中央教育審議会へ諮問「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」がなされました。
今後、教員養成大学はいかにして、学校現場に多様かつ実践力のある優秀な人材を送り出せるか、その真価が問われることになります。
今回、新たに本学理事として就任いただいた前東京学芸大学学長の鷲山恭彦氏との対談を通して、教師を目指す皆さんへのメッセージをお伝えします。

【撮影場所】
教育資料館『新薬師寺旧境内遺跡展』
（平成23年1月29日まで開催）

③【巻頭特集 学長対談】
長友恒人学長 × 鷲山恭彦理事

⑧ 幅広い知識と経験を 特色あるプログラム
新理数プログラム
あなたも理数で輝く先生に！ 理数教育研究センター長 松山 豊樹
食育リーダー養成プログラム
地域・学校の食育を支援します —「食育リーダーの養成」— 生活科学教育講座 教授 鈴木 洋子
「地域と伝統文化」教育プログラム
地域の誇りを世界へ 美術教育講座 教授 山岸 公基
海外留学プログラム
世界へ羽ばたき国際交流 キャンパス内で気軽に国際交流 副学長（国際交流・地域連携担当） 加藤 久雄

⑫ ぶらり散策ガイド
～平城遷都1300年祭 平城宮跡会場～

⑭ ラボ・レター 学校教育講座 准教授 根來 秀樹

⑯【留学生レポート】
アメリカが私に教えてくれたこと 学校教育教員養成課程 4回生 木村 祐葵
24時間、学びの時間 日本語・日本文化研修留学生 ダリオ・イマス

⑱ ひと・あれ・これ 生駒市立 鹿ノ台小学校 常勤講師 金 秀勇

⑳【キラリ☆奈教生】
第84回国展 千野賞受賞！
彫刻を通じ空洞の果てなき魅力に迫る!!
大学院 教育学研究科 修士課程 2回生 山下 圭介

㉒【課外活動】
男子サッカー部 男子サッカー部はファミリー 主将 福嶋 亮輔
漫画研究会 やりたいことがやれる場 部長 田中友貴恵

㉓ 活躍する奈良教育大生

㉔ 奈良に息づく仲間たち
自然環境教育センター長 教授 鳥居 春己

ならやま
2010年夏号

CONTENTS

〈表紙題字〉
名誉教授 池田桂鳳

表紙紹介

夏

夏といえばセミの鳴き声を聞きながら、たまった宿題に追われた子ども時代を思いだします。
高校生ら受験生にとって、夏は進路決定の時。最近は進路を定める時期も早まってきているとは聞きますが、奈良教育大学にとっての夏は、そんな高校生たちへ大学を紹介するオープンキャンパス（7月31日）を開催する季節です。
例年、奈良教育大生が案内をつとめ、自分たちの大学のすべてを参加者に紹介しています。そんな自分たちの大学を愛する奈良教育大生によって奈良教育大学は支えられています。
表紙はオープンキャンパスの広報ポスター撮影での1枚。
撮影には、キャンパスで学ぶ留学生や野球部員、理数科学生など多様な奈良教育大生が協力してくれました。
決して大きな大学ではないけれど、フレンドリーでチームワークある学生たちが奈良教育大学の自慢です。さわやかな彼らには、夏の緑が本当によく似合います。
（企画・広報室）

撮影協力（敬称略）
（上段左から）
Dragomir Andreea Florentina、
白井晶浩、なつきょん、藤浪謙、
中川由利恵
（下段左から）
原佑輔、Nguyen Kieu Giang Huu
陳少鵬、Imaz Cesar Dario

ポスター制作
なつきょん's CLUB
甲斐由里恵、中川由利恵、
浜田丹生、原佑輔

鷲山恭彦
わしやま やすひこ
1943年2月生まれ
東京大学大学院修了
専門はドイツ文学、ドイツ社会思想
平成15年から今年3月まで東京学芸大学学長。4月から本学理事。

長友恒人学長（以下　学長）　鷲山先生は、東京学芸大学学長として、また、日本教育大学協会の会長として、6年余り広い視野から教員養成のために貢献してこられました。先生を、新理事としてお迎えできたことを大変嬉しく思っております。

はじめに、先生にとって奈良はどういうところでしょうか。

鷲山恭彦理事（以下　鷲山）　奈良という と、「青丹よし　ならの都は　咲く花の　におふが如く　今盛りなり」の歌を直ちに思い浮かべます。小学校5年の時に、初めて覚えた和歌です。絢爛豪華で素晴らしい所というイメージですね。中学校の時に法隆寺、東大寺に修学旅行に来て以来、今回で3度目になります。

3度目の出会いが奈良教育大学の理事ということで、こんなに光栄なことはありません。しかも今年は「平城遷都1300年」でしょう。奈良教育大学の発展のために微力ながら尽したいと思います。

「記憶の深い人間」に―奈良でこそ

学長　奈良教育大学は、東京学芸大学と違って、規模は小さいですが、それを逆手にとって奈良の特色や魅力を出していこうとしています。今まで外から本学を見てこられていかがでしょうか。

鷲山　私の専門はドイツ文学なのですが、ドイツでは、百万人都市というと、ミュンヘン、フランクフルト、ベルリン、ハンブルグくらいのもの。あとは二十～三十万人の都市で、これが素晴しい。まとまった一つの親密圏をつくっています。学生も地域に溶け込んでいて、生活するにしても、勉強するにしても落ち着いた良好な環境になっています。ドイツ語でアンゲネーム クライン（コンフォタブル スモール　心地よい小さな空間）という言葉がありますが、そういう感じが奈良にも本学にもありますね。

それに、こんなに古い歴史があるところは日本では他にはありません。大変な所に住んでいるのですから、学生のみなさんは、飛鳥、白鳳、さらには百済と、奈良に関わる歴史は徹底的に学んでもらいたいですね。

過去をしっかり知るということは大切です。「記憶が深い」ということは、直面している現代的課題に対しても、それだけ深く考察できるし、対応できるということです。そうした素晴らしい人間的・教養的基盤の上に、いろいろな専門が研究できる、そしてそれが次世代への教育に還元される。奈良教育大学ならではのことで、規模からいってもきめの細かい教育ができますから、可能性をいろいろ考えると胸がときめきます。

学長　世界遺産になるような古都奈良にあっても、意識してみないと歴史が身についてこない。極端な場合は、奈良教育大学に在学している4年間に一度も、大仏様をみたことがない。いつでも行けると思っているうちに卒業してしまったというケースも。

鷲山　意識性がないとダメですよね。私も静岡県生まれですが、富士山に登ったことがない（笑）。

学長　古都にあるということで、過去をどう活かしていくかということだと思います。昔のことを単に振り返るのではなく、それを現代の課題に照らしてどう活かしていけるかの視点をもって見ていくと、過去も活きますね。

鷲山　「伝統と革新」と言いますが、伝統は、まず学ばないといけない。革新は、今日の色々な課題に敏感であった時に、初めて学んだことをどう活かせるか考えるわけで、現代の課題への鋭敏な問題意識をたくさん持たないと、活かせませんね。

これまでの学問成果や文化遺産を徹底して学び研究すること、それと同時に、今日の課題へのセンスを磨くこと。このダイナミズムを自覚的に身に付けたいですね。

長友恒人
ながとも つねと
1943年9月生まれ
京都大学大学院修了
専門は物理学、文化財科学
昭和48年本学助手
平成3年教授、副学長などを経た後、昨年10月から本学学長。

ドイツ語教師―「実学」でなく「虚学」に賭ける

学長　先生は、ドイツ語を教えてこられました。

鷲山　新課程に欧米研究専攻ができてからは専門のドイツ文学・思想の講義をしましたが、主には、1年生と2年生のドイツ語を教えてきました。専門の違う全学の学生を対象として面白かったのですが、ごく一部の人を除いて、卒業したらドイツ語はいらなくなる。無意味になるものを教えるわけです。教える意味を考えましたね。

英語以外にもう一つ言語を学ぶことで、語学へのセンスを養う、ドイツの文化を知る…単にドイツ語を教えるのではなく、ヘッセやトーマス・マンやゲーテといった作家、カントやヘーゲルといった思想家たちの言葉、あるいはドイツの歴史を通して、ドイツの特殊性と普遍性、人間の根底に触れる授業をと思いました。

役に立たないだけに、普遍的なものに触れる、真理と真実に触れる、そして魂に触れる、そういうことを考えました。

役に立つ学問はもちろん大切です。しかし「実学」は、当面のことに規定されすぎて、意外と浅かったり、賞味期限があったりする。ドイツ語のような役に立たない「虚学」の方が、普遍的、永遠の相のもとにある。大学ではこうした観点から学び、教えることが大切だと思います。

素粒子論だって、天文学だって、役には立たない。でも、物質はどう由来し、どういう構成か、宇宙はどう生成していくのかは、人類の根源的な関心事でしょう。大学ではやはり「虚学」に賭けないと。そこで本質に触れる。こうした原理的なことをよく考えると、社会に出ても、自然・人間・社会について、本当の見識が発揮できるのです。

学長　学生の学びを「実学――虚学」の関係で考えられたわけですね。

鷲山　そうです。そして知的関心を触発する授業をどうつくるかですね。夏休み、秋休み、冬休みとあるものですから、ドイツ関係のみならず、いろいろな本を3冊はレポートさせました。授業で学生に3千円は散財させましたね。レポートをちゃんと出した人には最低点はつけるようにしました。それでもダメな学生には、ドイツ語で『野バラ』を暗記して歌ってもらうとか。

今、思いがけないところで「先生にドイツ語を習いました」という人に出会います。若気の至りで何を教えたのか冷や汗がでるのですが、いろいろな試みをすることが大切ですね。自分が面白いと思うことが大事。

コミュニケーション―語り合う仲間がいる

学長　先生ご自身の学生時代は、どうだったのでしょう。

鷲山　学生の頃には、「道」を求めていたと思います。如何に生きるべきなのか、何のために生きるかと。私がドイツ文学を選んだのも、ドイツには「教養小説」の系譜があって、主人公がいろんな人と出会いながら自己形成をしていくことに惹かれたからです。

独りで考え込んでいると、自分の枠を出ません。1部屋6人の学生寮の生活を2年間経験しましたから、いろんな人と議論をしつつ、観点を突き詰めたり、広げたりして、自分の意見を形成していくことの大切さを学びましたね。

専門に進んでからは、3～4人の読書会のグループを作って、トーマス・マンの『魔の山』を読んだり、ヘーゲルの『精神現象学』やマルクスの『経哲草稿』を読んだりして、そこでの議論は今でもどこかに残っています。

学長　先生と私は同じ世代だから、今のお話をよく理解できます。大学で留年が決まったとき、約3ヶ月間、授業をさぼって、朝から晩まで本を読んでいた。50日で60数冊読んだと記憶しています。

でも、夜になったら友人の下宿へ行って話し込んだり、酒を飲んだりしていました。今思うと学生時代、何を悩んでいたのかと思いますね（笑）。若者の悩みの基本は昔と変わらないのでしょうが、今の学生が何を考えて、何を生き甲斐としているのかが、私たちはきちんと掴めていない。

鷲山　みんな悩んでいて、いろいろ考えていると思います。でも私たち教員は自分の学生時代のイメージでしか、掴めていないのかもしれませんね。

学長　そういう意味では、コミュニケーションがとても大事で、他人の発言の中に自分の発想で出てこないものを見つけることができる。コミュニケーション力というときに、学生同士あるいは先生とのやりとりの中で、自分の考えなり、感じたことを正確に伝えることと、正確に聞き取ることの両方ができるようになると、スムーズにいくのだろうと思いますね。

鷲山　おっしゃるように「聞く力」も大切です。今その力が落ちているといいます。みんな自己中心になっているのでしょうか。おっしゃるようにコミュニケーションをいろいろな局面で構成して、問題を共有していくことが大切ですね。

教師として、人間としての魅力―それは「学び」と「体験」の深さに

鷲山　奈良教育大学では、昔から実践を活かした素晴らしい取り組みを様々にされていますね。

学長　代表的な取り組みとして、〝新理数プログラム〟があります。「理数教育研究センター」を中心に地域の小学校、中学校や高校などと連携して「理数科離れ」対策に取り組んでいます。このプログラムに参加した学生たちは、理数科の先端的な知識と教育実践力を確実に身につけています。

　3月に三重県との県境に近い曽爾村の中学生を対象にしたウィンター・スクールに同行した時、学生たちが授業をし、積極的にアシストをしている姿を見て、こんなにも生き生きと逞しいものかと思いました。

鷲山　全国の教員養成大学のモデルとなる素晴らしい取り組みです。とりわけマネジメント能力などは講義では身につきません。いろいろな活動をし、実践してみて、はじめて身につくものです。

　体験は大事ですよ。教育現場に行くことはもちろん、語学滞在して外国でいろいろな友人をつくったり、海外協力隊やワーキング・ホリデーにも行って欲しいですね。体験蓄積と体験止揚、それを踏まえての自己形成――これが大学生活の基本でしょう。

　それに、教科の学びで大事なことは、古典との対話です。先ほどトーマス・マンやヘーゲルを挙げましたが、「対話」と言うより、よく判らないから「取っ組み合い」ですね。そこに大学教員も一緒に加わると、思想の核心や学問のツボがわかってきます。

学長　理科系で言うと、研究論文を沢山読むということですね。そうすると研究とは何か、ということやアプローチの仕方がわかってくる。教師になった後の分析力はそこから出てくるのだと思います。

鷲山　文献や論文を読む癖がついた人は、アプローチする方法論を自然に身につけますね。探求心が更に増し、拓けていくことのおもしろさを体感できる意味は大きいですよ。

学長　ハウツーものでだけ教えていると、教師になってから力は伸びません。

鷲山　おっしゃるように、教え方だけやっていてもだめで、やっぱり「学問」です。つまり、「問うことを学び、学ぶことを問う」。それがないと、ハウツー人格になってしまう。生徒たちはそれがわかって、見抜かれてしまう。人間の魅力は、存在に「凄み」のあること。学問と取っ組み合い、辛い体験や失敗も含めた経験をたくさんしないと。

キャリア教育―将来の仕事の意義をどう伝えるか

学長　キャリア教育（職業観・勤労観の育成）の柱は、自分の人生の中に仕事をどう位置づけるかということだろうと思います。それが明確になれば、自分に適した仕事を選ぶだろうし、壁にぶつかっても新しい意義を見いだすことができるでしょう。

　その仕事が教師なら、入学後からずーっと子どもをみて、さらに教育実習で接し、教師という仕事が素晴らしいと身体で実感することがとても大事なのだろうと思いますね。ただ、その場合に、先ほどからのお話と関連してきますが、経験だけではなくて、教育という仕事を論理的に捉えられる思考力が備わっていることが必要です。

鷲山　教育って素晴らしい仕事です。人間の成長や発展に関わり、人類の産み出した成果や遺産を未来に創造的に託していく仕事なのですから。

学長　その確信は大切ですね。ただ教師になって何年か経つと疲れてくる。そこで一度、例えば大学院に戻って振り返る、それは、これからますます必要なことだと思いますね。

鷲山　おっしゃる通りです。教職大学院はそのために出来ましたし、既設の大学院では教科専門的に研究できますから、教師になった人たちが大学院と何らかの関わりを持つことは、これから重要です。その場合、大学教員として教える側の力量も問われますね。

学長　それは重要です。大学教員も、自分が教員養成大学にいて、将来教師になる学生たちを前に教えることの重要性をどう自覚し、考えるかが大事なところです。自分の専門を教授するだけでなく、教育や教育現場と関わらせる問題意識を常に持つことがこれからますます求められますね。

鷲山　学校現場は、今、当面の新しい課題に振り回されて大変ですね。教育実習に行って、教師になることに不安を感じるような局面もありますから。事態を正確に掴めるように豊かな分析力を培うことや、解決方法の探究は大切ですが、最終的には技術でも何でもなく、「あの先生と話したい」という人間の魅力がポイントではないでしょうか。そのためには心の修養も積まないと。

「憧れに憧れる」―それが教育の本質

学長　私は学長に就任した際、〝教育とは、ロマンに満ちた価値ある営み〟と言いました。

　一方で、教育現場から求められる教員の資質として、たくましさ、しなやかさ、打たれ強さが言われています。そういう厳しさのなかでもロマンや憧れを見つけ出していく強さが必要なのでしょう。

鷲山　フランスのジラールでしたか「憧れに憧れる」ということを言っています。あの先生は素敵だ、だから私もあの先生のようになりたい――憧れられるような先生は、その人自身が憧れを持っているからなのだと。

学長　そういう魅力が人を惹く。そういう魅力ある人材をいかに送り出していくかですね。

鷲山　中教審答申などでは、いろいろ教員の資質について言及がありますが、学長の言われるように、まずロマンであり、憧れでしょう。その後から、たくましさ、しなやかさ、打たれ強さがついてくる。

学長　今年から、新たに第2期の中期目標期間（6年間）がスタートしました。

　奈良県もそうですが大都市圏ではこの期間中は当面、教員の需要はあると予想されています。そういうときだからこそ、教育の質をどう高めるか。つまり、教育の質保証をいかに形あるものとして実現していくかが課題です。

　教師として教える能力の質と教師としての資質（子どもに接する、学校経営に参加できる、保護者と対応できるなど）、その両方の質を高めるためにどう工夫し取り組んでいくかだと思いますね。

　これからも、様々な場面でご助言くださるようよろしくお願いいたします。

　本日は、ありがとうございました。

教科書研究発表会

新理数プログラム

あなたも理数で輝く先生に!

理数教育研究センター長
松山　豊樹

はじめに

理数離れは、言われ始めてから約二十年近くにもなります。理数は、我々の生活を支える科学技術の重要な基盤であるだけでなく、一人一人の人生を豊かにする「考える力」を育みます。教員養成を使命とする奈良教育大学では、平成17年度から理数に強い教員の養成を始めました。「新理数」と略称され、正規の教科以外に、これから紹介する特別な教育プログラムを希望制で履修することが出来ます。

「興味・発想」の芽、「論理・抽象的思考」の力を育てる導入教育

新理数プログラムは、1回生前期の「先端科学の基礎概念」というオムニバス形式の授業から開始されます。それぞれ、物理、化学、生物、地学、数学を専門とする十数名の教員が自分の分野の先端的なトピックスをリレーして授業を進めて行きます。各分野の興味深い話を半年で聞くことが出来ます。

後期には、「新理数基礎ゼミナール」が行われます。前期の授業で興味を持った分野を選び、担当の教員からゼミナール形式で指導を受けます。このとき、徹底した少人数教育が行われます。1名の教員に対して学生2～3名、場合によっては、1対1になったりもします。また、1回生から数学の科目を一部前倒しして受講することが出来ます。これらの科目で、論理・抽象思考能力の向上のためのトレーニングが行われます。

教科専門性と教育実践力の向上

2回生から、「新理数教育Ⅰ～Ⅳ」の科目群が開始されます。2～3回生の間に、学生各自の力量を伸ばすために、プロジェクト教員のアドバイスを受けながら、様々なメニューを選ぶことが出来ます。教科専門性を向上させるためのゼミナールが実施されます。教育実践力を身につけるために、連携協力校の授業に実際に入ることが出来ます。独自の教材・カリキュラム・教科書の開発を進めることが出来ます。その他、ここには書ききれませんが、様々なミニ・プロジェクトが同時進行で2年間走り続けます。

大きな山場は、2回生の夏に山村部の小・中学校に3泊4日の合宿をして実施される「サマースクール」です。そこでは、学生自らが企画した理科・数学（算数）実験のブースを運営し、児童・生徒たちに科学の楽しさを満喫してもらいます。純粋な児童・生徒たちの輝く瞳は、学生の教師像形成の原点となるでしょう。

SST認定

新理数プログラムには、二つのコースがあります。一つは、理科・数学（算数）を専攻する学生を主たる対象としているSuper Science Teacher（SST）コースで、一定の基準を満たすと奈良教育大学として学長名でのSSTの認定を行います。SSTは、理科・数学（算数）の教員として特に優れた力量を持っている教員の証となります。一方、主に文系の学生は、SSTベーシック・コースに参加することが出来ます。小学校教員は、理科・数学（算数）を専攻していなくても、それらを教えなければなりません。理科・数学（算数）を専攻しないが、小学校教員を目指す学生には、是非参加して欲しいと思います。

理数で輝く先生に!

教員を志望する受験生のみなさんは、順調に行けば、今から約4年半後に学校の教壇に立っていることでしょう。未来のあなたは、どの教科を担当しているでしょうか？理科・数学の教員となり、生き生きとした授業をやっているでしょうか？苦戦していませんか？文系を専攻したあなたは、小学生の素朴な質問に戸惑っていないでしょうか？新理数プログラムは全国的にも珍しい教育プログラムです。是非、奈良教育大学で「理数で輝く先生」を目指しませんか？

参加学生の声

SST 二期生
大学院 教育学研究科
修士課程 教科教育専攻
理科教育専修 1回生
（私立甲南高校出身）
大久保和則

新理数での4年間は、少人数ゼミや、授業観察、教材開発など、贅沢な日々でした。「新理数教育」では、やりたい実験教材に挑戦できる環境があり、たくさんの失敗と成功を経験できました。また、高大連携では、教師の仕事を間近で感じることができました。一番学んだことは、教師には、教科専門のスキルが重要だということです。授業の説明や、生徒とのかかわりの中で、如実に表れてくることを身を持って感じました。

SST認定書授与

食育リーダー養成プログラム

地域・学校の食育を支援します

―「食育リーダーの養成」―

生活科学教育講座
教授　鈴木　洋子

「ニワトリ症候群」を知っていますか

現代の子どもたちの食習慣の乱れを表すのに「ニワトリ症候群」という造語が使われています。造語の由来は、一人で食事をする様子を示す「孤食」、朝食を食べない「欠食」、同じ食卓についている者たちが異なる献立で食事をする状態を指す「個食」、同じ食品しか摂らない様子を指す「固食」の最初の文字を並べると「孤欠個固（コケコッコ）」になるからです。

食習慣の乱れは子どもに限ったことではありません。朝食の欠食は、20代、30代の男性に特に目立っています。食習慣の他にも、食品の産地偽装、原材料偽装、消費期限・賞味期限の偽装など、食品の安全を巡る事件が後を絶たない状況にあります。さらに食料自給率の低迷など食生活が抱える問題は多大です。このような事態を打開するために政府は、平成17年に食育推進基本法を策定し、翌年に食育推進基本計画を発表しました。一方、文部科学省は、「食に関する指導の手引」を作成し、食育の推進体制を整備することを日本中の学校に通達しました。

「食育リーダー」を育てます

食育基本法が成立する以前から、本学ではフレンドシップ事業※「味覚をいかしたクッキング」で料理教室を開催し、地域の子どもたちの食育推進に協力してきました。また、基本法成立の翌年、平成18年には教養科目に「食育と生活」の授業を新設するなど、食育について学ぶ機会を提供してきました。これら食育への取り組みが高く評価され、文部科学省による平成20年度「質の高い大学教育推進プログラム」に、本学の「教員養成大学による地域食育推進プログラム―食育オフィスの開設と食育リーダーの養成―（通称：食育GP）」が選ばれ、地域貢献と教員養成の両面から食育を支援する組織を充実させることができました。

写真1

教員養成においては、食育推進の中心的存在となる教員（食育リーダー）を養成するための食育・健康教育プログラムを実践しています。これは、食育の必要性や考え方を体系的に教育し、実践的指導力を育成するとともに自己の食生活を管理する能力を高めるためのプログラムです。プログラムは、教養科目群、専門科目群、実践科目群から構成されています（図1）。プログラムの中のインターンシップは、奈良の食文化に親しむとともに生産労働を体験することを目的としており、大学の近くにある老舗奈良漬店のご協力により実施されています（写真1）。

また、フレンドシップ事業として、毎年料理教室を開催し、学生たちが小学生を相手に先生役を務めます（写真2）。「食育かるた」は授業を通じて学生たちが制作しました。奈良県下の小学校において、子どもたちが楽しみながら食べることの大切さを理解するのに広く利用されています（写真3）。

プログラムを終了した学生にはプログラム修了証書が授与されます。卒業後の勤務校において、栄養教諭の先生を助け、食育実践の中心となることが期待されています。

地域の食育推進をお手伝いします

地域貢献においては、教材教具の開発と配布、子ども用包丁の貸し出し、シンポジウムや料理講習会の開催等を通して、学校や家庭における食育を応援しています。家庭科や栄養教職員の先生方と「食育リーダー」を目指す学生が協力して制作した教材DVD「奈良に学ぶ」は、学校の授業などで活用されています（写真4）。奈良県下の図書館や公民館でも視聴することができます。

※フレンドシップ事業…学生が子どもたちへの体験活動を実施することで実践的指導力の基礎をつけることを目的とした事業

参加学生の声

学校教育教員養成課程
理数・生活科学コース
家庭科教育専修　4回生
（福井県立若狭高校出身）
三宅　麻未

私が食育GPの活動で魅力的だと思うことは、食育に関する様々な経験ができるところです。授業で得た知識をいろいろな活動のなかで実践できるだけでなく、奈良漬をつくったり、子どもたちとのフレンドシップ事業を通して新しく発見できることがたくさんありました。これらの活動を通してあらためて食育の大切さに気づき、これから教師になってどのようにして食育をすすめていきたいかを考えられるようになりました。

写真3

写真4

写真2

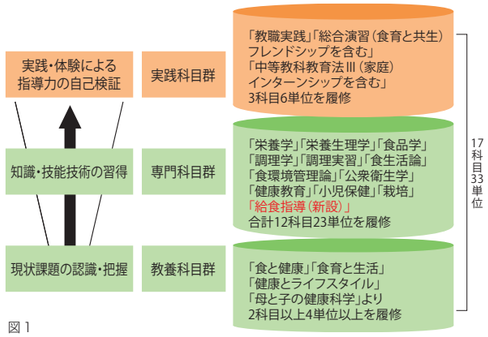


図1

「地域と伝統文化」教育プログラム

地域の誇りを世界へ

美術教育講座
教授 山岸 公基

奈良の伝統文化と文化財教育のリーダーに

「地域と伝統文化」教育プログラムは、日本国内だけでなく世界から注目を集めている奈良の伝統文化・文化財について、学際的・教科横断的な認識・理解を形成し、知識基盤社会を多様に支える高度専門職業人として、リーダーシップを発揮する教育者を養成することを目的とした、大学院生対象の教育プログラムです。

国際シンポジウムにて

授業とフィールドワークなどで実践力を養成

プログラムでは、これまでに次のような取り組みを行ってきました。

奈良の伝統文化・文化財をテーマにした授業科目の組織化

共通コア科目「世界の中の奈良」、実践コア科目「伝統文化発信法」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを新たに立ち上げました。これらの新設科目は、従来から奈良教育大学において展開されてきた、奈良の特色ある伝統文化と接点を持つ多くの授業科目や、そこで履修生が身につける多様な専門的知識・技能を、実践面を重視しながら束ねるものです。必要な単位を取得した履修生には「プログラム修了証書」を交付し、奈良の文化を継承・発信する力量を身につけたことを証しています。平成20年度には3名、平成21年度には5名のプログラム修了者を出しました。

国際シンポジウム・海外フォーラムの開催

平成21年度には、国際会議と海外フォーラムを開催。教員のみならず大学院生も発表やポスター制作に積極的に参加しました。また、海外フォーラムや国際シンポジウムでの発信の前提となる知識・経験・技能・国際性を習得するために、学内外有識者による連続講座や、奈良の伝統文化・文化財の源流および伝播の実態を探る国内外実地研修を積極的に実施してきました。連続講座は足掛け三か年で計23回、国外実地研修は計7回に及びました。

開催したシンポジウム等は以下の通りです。

百済文化国際シンポジウム
本学で開催。奈良教育大学・公州大学校（韓国）・東京学芸大学共催。

日韓大学院教育交流フォーラム
嶺南大学校（韓国）で開催。本学からは教員、院生が韓国に渡り、現地で嶺南大学校の教員・院生と研究発表・討論。あわせて国外研修を実施。

国際シンポジウム
「伝統文化と教育、その将来的展望に向けて」本学で開催。嶺南大学校・インドネシア教育大学・西安外国語大学（中国）の協定三大学と本学による。

文化の継承と発信

地域への貢献活動としては、「ならまち民話地図」（日本語版・英語版・動画版）ワークシート「馬具ってなあに?」「宝山寺獅子閣案内図」などをこれまでに作成し、「ならまち民話地図」は奈良市総合観光案内所に常置されています。

今年度のプログラムでは、展覧会「仏の中にこめられた想い」（7月26日～31日、教育資料館にて）や、秋には平城遷都1300年祭に関連したシンポジウムなどの開催を予定しています。これからも国際的視野やコミュニケーション能力を備えた、奈良の文化を継承・発信する修了生を輩出していくことをめざしていきます。

ならまち民話地図

百済文化国際シンポジウムで発表する大学院生

インドネシア実地研修

参加学生の声

大学院教育学研究科修士課程 教科教育専攻
美術教育専修 2回生
（秋田県立本荘高校出身）
作佐部 蛍

私は、協定校である韓国嶺南大学校での研究発表の他、学内展覧会のための寺社・美術館での調査やポスター作成といった広報活動に参加しました。座学で終わることなく、実地研修では異文化を肌身で感じ、一人では決してできない経験をたくさん積むことができたと思っています。他専修の教授陣や学生と協力しての授業、教材開発での試行錯誤は特に力になりました。プログラムを通して、奈良が持つ文化・歴史遺産の価値、国内外からの注目を再認識することができました。

海外留学プログラム

世界へ羽ばたき国際交流 キャンパス内で気軽に国際交流

奈良教育大学ではどちらも経験ができます!!

副学長（国際交流・地域連携担当）
加藤 久雄

得られるものは語学力だけじゃない

情報技術の発達などにより、時代は地球規模で考えるグローバル化へと進んでいます。海を越え諸外国で生活し、人間関係を築くことは決して楽しいことだけではありません。しかし、そこには人生観を変えるような貴重な経験が待っています。文化や価値観の異なる中で、地球人として世界とそして日本を考えることは、今後の人生にとって大きな糧となることでしょう。

本学では、7カ国11大学と国際交流協定を締結しており、毎年、各大学に1名又は2名の学生が一年以内の期間、留学することができます。留学中の期間も修学年限に通算され、長期留学プログラムの場合は、留学先で修得した単位も審査を経て奈良教育大学での修得単位として認定されます。また、交換留学期間中も本学へ授業料を納めることで、留学先大学の入学料及び授業料が免除となります。

今年度から韓国の国立公州大学校の短期留学プログラムが新たに加わりました。夏季休業中に二週間、韓国語や韓国文化の授業だけでなくユネスコ世界文化遺産探訪や、現地の教育機関訪問など、大変充実したスケジュールが組まれており、本学の学生は協定校参加費で割安で参加することが可能です。

多くの友人たちとの出会いも留学の醍醐味

国際交流のステージはキャンパスにも

一方で、現在18カ国から74名の外国人留学生が本学で勉強しています。入学したばかりの留学生のために、一人の留学生につき一人の学生がキャンパスライフや日本での生活をサポートするチューター制度を設けています。このような制度を活用することで、学内でも気軽に国際交流を行うことができ、各国からの留学生と友達になることが可能です。

国際交流協定校

国名	大学名
インドネシア	インドネシア教育大学
韓国	光州教育大学校
	公州大学校
	嶺南大学校
中国	華東師範大学
	西安外国語大学
ドイツ	ハイデルベルク大学
フランス	リヨン第三大学
ルーマニア	ブカレスト大学
アメリカ	セントラルミシガン大学
	ロック・ヘイブン大学

参加学生の声

総合教育課程 科学情報教育コース
物質情報専修 4回生
（国立奈良工業高等専門学校出身）
大畑 朋也

私は、協定校であるアメリカ、ロック・ヘイブン大学に、昨年8月から10ヶ月間にわたり交換留学生として留学していました。アメリカでの留学生活は、言葉、食事、文化など、日本では当たり前な一つ一つが当たり前ではなく、慣れるのに本当に苦労しました。そのような戸惑いの中から、言語の習得、異文化への理解、環境への適応といった日本では経験することの出来ない成長を自分自身で体感することが出来ました。同時に、これまでは日本から世界を見ていましたが、世界から私たちの国である日本を見つめるようになりました。帰国した今、留学当初の目的であった言語の習得は勿論のこと、人生観を左右する様な貴重な時間であったと実感しています。

世界中からの留学生との交流も

休日にはピクニックに

幼稚園を訪問して子ども達に日本を紹介

なっきょん's CLUB がゆく！

学校教育教員養成課程　1回生
浜田丹生さん

総合教育課程　1回生
中川由利恵さん

今年、奈良は平城京に遷都されてから1300年の節目の年になります。県内各所では、平城遷都1300年祭にちなんで様々なイベントが開催され賑わいを見せています。
今回は、そのメーン会場でもあり大学からもバス一本で行ける「平城宮跡会場」を学生広報スタッフ『なっきょん's CLUB』が体験レポートします。

① 天平衣装の体験

平城遷都1300年祭 平城宮跡会場

ぶらり散策ガイド

都の中心ではるか1300年前をおもふ

なんと（710）見事な平城京。かつてこんな語呂合わせで試験を乗り切った方もおられるのではないでしょうか。はるか1300年前の710年ここ奈良に元明天皇によって平城京が遷都されました。その中心となったのが、奈良市の西、近鉄大和西大寺駅と新大宮駅の間に突如現れる広大な場所、平城宮跡です。宮城である大内裏があったとされる場所です。

ここでは、遷都1300年祭のメーン会場として11月7日まで連日さまざまなイベントが繰り広げられます。会場では、実物大の遣唐使船を展示した平城京歴史館や疑似発掘体験や天平衣装体験ができる平城京なりきり体験館などを設けて、来場客をはるか奈良時代へいざなってくれます。わずか50㎝ほど掘れば遺構がでてくるこの場所でイベント用建物を建てる際には遺構を壊さないように盛り土を行い、緩衝材を敷くなどして重みを分散させるなど、遺構保護の工夫がされているそうです。

① 天平衣装でタイムスリップ

今回リポートを担当するのは、教育学部1回生の中川由利恵さんと浜田丹生さん。2人とも他府県の出身で平城宮跡に来るのは初めて。早速、当時にならい天平衣装に変身してみました。ちなみに中川さんの着ている紫のほうが、位が高いとのこと。感想は…ただただ暑い。

② 都の四方をかためる聖獣たち

朱雀門から北に約800mのところに今回復原された第一次大極殿がそびえています。その間には大きくひらける前庭があり大きな大極殿がより一層雄大な姿に映ります。前庭では天平衣装を羽織った来場者も多く見られ、まるで当時へタイムスリップしたかのような錯覚に陥ります。

大極殿内の壁には、四方向を守る聖獣、四神が描かれています。北の玄武、南の朱雀、西の白虎、そして東の青龍です。これらは、日本画家である上村淳之さんが実際に現場に足場を設け描かれたもので、壁には他にも十二支が描かれていました。

また、中央には当時の天皇がお座りになった高御座（たかみくら）が展示されています。その前に立つと天皇がご覧になったであろう景色を眼下に望むことができます。

③ いつの時代も仕事は大変

大極殿から東へ、第二次大極殿跡を抜けると疑似発掘体験や平城宮仕事体験ができる『平城京なりきり体験館』があります。ここでは、発掘現場に似せたスペースで、発掘調査の一端に触れることができる「疑似発掘体験」や天平衣装をまとい、平城京の映像を背景に写真撮影ができる「天平衣装体験」など様々な体験ができます。今回は、奈良時代の役人の仕事である木簡文書の作成体験「平城宮仕事体験」をしました。（一般500円、高校・大学生250円、小中学生200円）パソコンや携帯電話での文章作成に慣れてしまった今、筆を使って木簡に文字を書くのは大変。とても集中力が必要です。作成した木簡は記念に持ち帰ることができます。

② 第一次大極殿内

④ 平城京歴史館／遣唐使船復原展示

③ 平城京なりきり体験館　平城宮仕事体験

④ 日本の未来のために　遣唐使は命をかけた旅へ

会場の南西にある平城京歴史館。多くの人で賑わう人気施設です。館内では、遣唐使の歴史を映像で紹介したり、外国使節団が見た当時の平城京の様子を大画面で見ることができます。

会場に併設して実物大で復原した遣唐使船が展示されています。630年より始まった遣唐使は、多くの先進的な大陸文化を日本に伝えました。歴代遣唐使の中には、奈良教育大学キャンパス内にある吉備塚の由来ともなった吉備真備も含まれています。当時はまだまだ命がけの航海であったとのこと。遣唐使船に乗船してみるとその精巧なつくりに驚かされます。遣唐使の代表である遣唐大使の部屋も当時と同じく船尾付近に復原されています。（一般500円、高校・大学生250円、小中学生200円）

⑤ 厳かな衛士の姿に佇立す

会場の南にある朱雀門では、朝と夕方に衛士隊による開閉が行われます。夕日に照らされ朱色に輝く朱雀門に太鼓の音がゆっくりと響きわたります。一打、一打ごとに動きをなす威風堂々とした衛士たちの姿に、観覧する人たちは息をのみ、その一挙手一投足に視線を集めていました。

⑤ 衛士による朱雀門の開門

大学で開催する1300年祭関連イベント

寧楽夏季・秋季講座
奈良教育大学名誉教授陣による
様々なテーマの講座
夏季：8月7日（土）13時～17時
秋季：11月6日（土）13時～16時
無料・申込不要

本学独自のイベント

『新薬師寺旧境内遺跡展』
学内遺跡新薬師寺旧境内で近年検出した
遺物や復原模型などを展示
1月29日（土）までの平日
土曜13時～17時（日・祝休館）　無料

アクセス

遷都1300年祭平城宮跡会場には、大学からバス一本で行けます。
大学前にある奈良交通定期バス操車場、『高畑町』バス停から「38系統赤膚山ゆき」「260系統学研北生駒駅ゆき」乗車。約25分（近鉄奈良駅経由）。『二条大路四丁目』下車すぐ。

案内していただいた
（社）平城遷都1300年記念事業協会の
中村英三郎さん（中央）

障害に対する理解や知識を持つことが、障害がある子どもたちや、その両親、そして教師自身の支えとなる。

教育学部に来たわけ

２００９年３月まで奈良県立医科大学精神医学講座に勤務していました。教育学部に来た理由は数え切れないほどあるのですが、「児童精神科医として、これから教員になる学生に伝えたいことがいくつもあった」ということが大きな理由です。児童精神科医として出会った子どもと親が同意すれば、必ず担任の先生に病院に来ていただき説明をするというのを、この何年間か繰り返し繰り返し行ってきたのですが、障害に関する知識や理解また支援などに教員間であまりにも差がありすぎ、それをどうにかしないと子どもたちにとって大変なことになると危機感を抱いていたことが大きいと思います。病院に来ていただいてお話しするというのではあまりにも効率が悪く、また時間が少なすぎると考えた僕は、それ以降学校や県・市の教育委員会から呼ばれれば講演やスーパーバイズなどを行ってきたのですが、呼んでいただいた先生は確かに熱心なものの、こんなに大きな僕の声でも平然と寝ている先生も何人もいて、ここでも教員間の温度差を感じて、愕然とするだけでした。

今現在教員になっている人への啓蒙を積極的に行うことに加え、発達障害や精神疾患の知識を持った教員を育てたい。それが出来れば僕が奈良教育大学に来た意味が少しはあると思っています。

脳科学

研究分野は、これまで一貫して児童思春期精神医学の分野における精神生理学的研究を研究テーマにしてきました。特にＡＤＨＤ（注意欠如・多動性障害）のＮＩＲＳ（近赤外線スペクトロスコピー）やＥＲＰ（事象関連電位）を用いた評価や治療の効果における研究は厚生労働省の研究班の一員として行なってきたものを現在も継続研究中で、「ＡＤＨＤのガイドライン」にも取り上げられています。ＮＩＲＳとは近赤外線を用いて簡便に脳の血流の変化を捉えることができる検査方法で現在非常に注目されています。（写真１）ＮＩＲＳによるＡＤＨＤ児の前頭前野の機能不全を証明した僕たちの研究は日本人で初めて世界的な雑誌に掲載されました。図１は衝動性を抑制するような課題で定型発達児は前頭前野で血流が増加するのに、ＡＤＨＤ児ではその増加がほとんどないことを表しています。今後はある子どもに支援を行い、それらの効果を客観的に脳の働きとして表せたら興味深いと思っています。

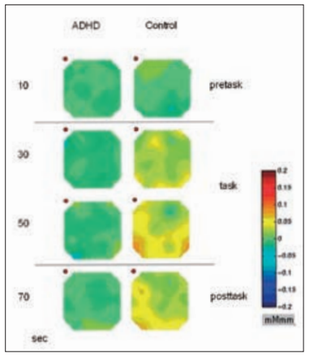


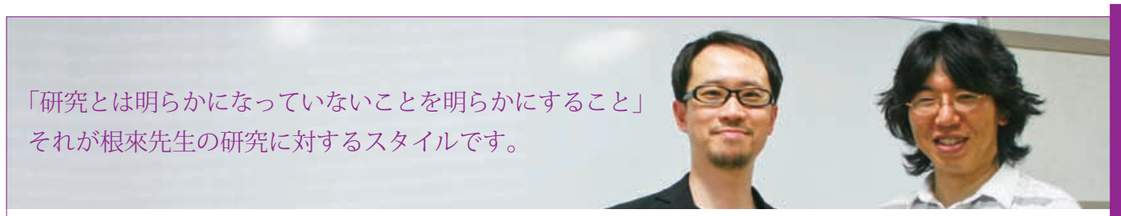
図１

学生へのメッセージ

各障害のほんの基本的な知識や対応を知っているだけでも、それから後、その教師が対象となる子どもや両親への支援をしていく上で大きな自信になると考えてきました。僕はこれから教師となる学生に障害の基本的な知識や対応を自分自身の臨床的経験を踏まえわかりやすく伝えたいと考えています。そのことで教師になった後、学校の先生（幼稚園も含む）が先に発達障害や精神疾患に気づき、早期から本人に応じた支援を行い、保護者にうまく説明がなされることで、経過がよくなることもあると思うので、現場の先生の「気づき」と「早期からの本人に応じたかかわり」のできる専門性、そして、保護者に寄り添える人間性の育成が大切であると考えています。興味がある学生さんは一緒に学んで行きましょう！

写真１

学生による研究室紹介



大学院教育学研究科　修士課程　学校教育専攻
教育臨床・特別支援教育専修　2回生
香芝市立志都美小学校教諭　**木村　光さん**

奈良教育大学の「ミスターブレイン」こと、根來秀樹先生と研究室を紹介します。

初めて研究室をのぞくとそこには医学関係の書籍がいっぱいでした。

根來先生は、２００９年度に奈良県立医科大学より学校教育講座（障害児医学分野）の教員として奈良教育大学に着任されました。

先生から本学に来られたきっかけを聞く機会がありました。

先生は、児童精神科医としてさまざまな困難に直面する子どもたちと向き合う中で、子どものまわりのおとな（親・教員）が、障害や症状のほんの基礎的な知識や対応を知ることで関わり方に変化が見られ、親（家族）・医師（医療機関）・教員（教育機関）などの相互「連携」がうまれ、子どもたちの症状が改善されていく様子をみてこられました。そのことから先生は、教員やこれから教員を目指す学生に、障害や症状についての基礎的な知識についてこれまでの臨床経験をふまえながら伝え、子どもたちを中心にしたおとな間の「連携」をつくることのできる教員を育てることが教育現場に必要と考えられ、奈良教育大学へこられたそうです。

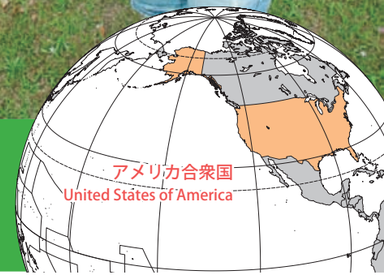
初年度のゼミ生となる私は、現職教員として大学院に入学し、およそ20年ぶりに母校に再び通うこととなり、根來先生と出会いました。根來先生は研究論文には非常に厳しく、常に理論的な根拠を聞かれます。「研究とは明らかになっていないことを明らかにすること」それが根來先生の研究に対するスタンスで、そのためには現在明らかになっていることを充分に知る必要があると常々おっしゃっています。

自分自身、教員として、いじめに悩む子、不登校の子、障害を持った子、さまざまな子どもたちと関わってきました。その中で子どもたちの支援について先輩教員や相談機関・医療機関などいろいろな立場の方々から意見を聞いたり、アドバイスを受けたりして何とかこれまでやってこられた感がありました。今後は特別支援教育コーディネーターとして、同僚や後輩・保護者からの相談を受ける立場になります。子どもたちを中心にした「連携」のつなぎ役として大学院や根來ゼミで学んだことを役立たせたいと思います。

留学生レポート

アメリカが私に教えてくれたこと

学校教育教員養成課程 言語・社会コース
英語・国際理解教育専修４回生
（大阪府立生野高校出身）
木村 祐葵



留学で得た外国での生活を成功させる秘訣

私は２００９年８月から十ヶ月間、アメリカのセントラルミシガン大学へ交換留学生として渡米しました。中学校時代から留学することを夢見ていた私にとって、この十ヶ月間はかけがえのない宝物になりました。

今振り返ると当時はなんて度胸がなかったのだろうと思います。英語と人種多種の外国人で溢れかえったアメリカに着いた途端、私は今まで感じたことのない不安に苛まれました。わからないこと、困ったことが初めのうちはたくさんありましたが、それを問う勇気もなく常に周りを見ながら消極的に学ぶということの繰り返しでした。しかし銀行カードが届かないという事件をきっかけに私は「自分で働きかけていかなくてはいけない」と思うようになりました。大学についてすぐに私は銀行口座を作ったのですが、一向にカードが届かない。そこで私は「このままだとお金が出せなくて生活が出来ない」と毎日のように下手な英語を使いながら銀行に抗議に行きました。あの時は大変な思いをしたのですが、今思い返すとあれがきっかけで私は英語を使って意思疎通するという度胸を身につけられたと思います。

それ以降私は積極的にいろいろな人や行事に関わることに対して戸惑いを忘れ、留学を終える頃には初めて会った人とでも気軽に話したりできるようになりました。友達と初めて計画したシカゴ旅行では苦戦することも多かったのですが、現地の人に道を聞きながらもうまく旅することが出来ました。外国で生活するために欠かせないこと、それは言語よりむしろその国、人々に関わっていこうとする気持ちと度胸だと実感しました。これは留学なしには学べなかったことだと思います。

友達の婚姻届の証人として

ルームメートの実家にホームステイ

プラスにもマイナスにも取れる文化の違い

留学生活に少し慣れてくると、文化の違いが見えてくるようになりました。当初は文化の違いから生じるマイナスイメージばかりに目がいってしまいました。アメリカ文化と長年慣れ親しんだ日本文化とを比較することで「なんて日本はいい国なんだ、私が日本に戻ったらもっとよくしていくために貢献していきたい」と強く思うようになりました。しかし半年近くがすぎる頃から、アメリカのいいところが見えるようになりました。中でも、私が一番好きなアメリカの側面は「簡潔」、「対等」という点です。アメリカ人は物事を直接的に言う人がとても多いです。初めは「きついなぁ」と感じたのですが、誤解がないようにはっきりと述べるというこの文化は理にかなっています。そして相手を褒めるときにもダイレクト表現を使います。少し恥ずかしいようなことでも平気で言い合えるので私はこの「簡潔」をモットーにしている文化が好きになっていきました。そんな文化の違いの発見に出会えたことを嬉しく思っています。

Reverse Culture Shock?! 留学を終えて今思うこと

日本に帰ってくるとReverse Culture Shockというものを経験します。他人に気を遣うことを今まで当たり前だと思っていた私ですが、飛行機に乗った時に隣に座った日本人が私のことを気にかけてくれた時に逆カルチャーショックを受けました。

今振り返ると、アメリカでの生活はまるで夢を見ていたかのように思います。なかなか友達が出来ず悩んだり、一日中勉強漬けの毎日に嫌気が差したりした時もありましたが、そんな困難も乗り越えて今の私がいます。今でもふと空を見上げアメリカで生活している人々のことを思い出したりします。大変なこともたくさんありましたが、全部がいい思い出です。国を越えて、私の見えないところで頑張っている人がたくさんいる、そんな風に世界の繋がりを感じるようになった今では留学を通して少し視野が広がったように思います。

The world is a book, and those who do not travel read only a page. -Augustine-
（この世界は一冊の本のようであり、旅することのない人はそのたった一ページしか読んではいない。）

これは奈良教育大学で知り合った留学生が私の留学前にプレゼントしてくれた言葉です。この言葉が表すようにこれからも多くの後輩たちがこの交換留学制度を通じ、新たな発見や体験に出会えることを願っています。

24時間、学びの時間

日本語・日本文化研修留学生
ダリオ・イマス

日本と私

私は子どものころから、日本文化に深く興味を持っていました。日本は私の母国・アルゼンチンから非常に遠くて、珍しい国なので、出来ればいつか日本へ行きたいといつも思っていました。そう思いつつ、日本語の勉強に励んでいたある日、日本へ行く為の試験があり、合格出来ました。それで去年の10月、家族は私を見送るためにブエノスアイレス国際空港まで来てくれました。その時、お母さんは「いよいよ日本に行くことになって、夢がかなったね。」と言ってくれました。それから三十時間以上も飛行機に乗って、やっと日本に到着しましたが、アルゼンチンとは時差もあり、季節も全然違いました。

今、奈良教育大学で勉強して、もう八ヶ月になりました。この八ヶ月間、留学生活を大いに楽しみ、時間がとても早く経ったと思います。

よく学び、よく遊べ

日常生活では日本語と日本文化との出会いが多いです。ですから、外国語の勉強というのは、授業時間以外にも勉強することが出来ます。

たとえば、日本のテレビでは非常におもしろい番組がたくさん放送されています。ですから、テレビを見ながら現代語の表現や漢字の読み方、発音などが学べます。

旅行中でも学ぶことがたくさんあります。例えば、郷土料理。私が旅行した時、日本人の友達は「広島のお好み焼きを食べましたか？」または「福岡へ行ったら、絶対博多ラーメンを食べてみてね」と言いました。郷土料理の味は日本人にとって本当に大切なことだそうです。

一方、地元の方言も習うことが出来ます。名古屋に行った時、私の友達は名古屋弁で「来てよかったね。でら嬉しいだがや」と話しました。

ところで私は毎日、色々な国の留学生と一緒に生活し、そこでも豊富な経験をしています。そのため、日本語と日本文化だけでなく、トルクメニスタン、モンゴル、セルビア、中国といろいろな国の文化を学び、アルゼンチンの文化も教えられます。

アルゼンチンの文化と日本の文化はかなり違いますが、日本に着いたときから、いろいろなことに驚きました。男性も化粧すること、授業中に学生が寝ること、お正月に花火がないこと、休みが短いこと、電車の中でマンガを読む人が多いこと、冬でも小学生が短いパンツで薄着でいること、王様になったみたいな気分にさせられる良いサービス、たくさんのお笑い番組があること、などにビックリしました。

よく学び、よく遊べと言われますが、外国に住んで、一日中ずっと文化交流をしているので、遊んでいても、学んでいることになると思います。そういうわけで、日本での生活は忘れられないほど豊かな経験になりました。

留学生実地研修旅行～明石大橋にて

ひと・あれ・これ

生駒市立 鹿ノ台小学校 常勤講師

金（キム） 秀勇（スヨン）

（平成18年3月 教育学部 言語・社会コース 社会科教育専修卒業）

「毎日忙しいですが、自分には会社で働くよりも教師の方があっているので、楽しんでいます。」真っ黒に日焼けした身体から子どもたちとの充実した毎日がうかがえる。奈良県教員採用試験に外国籍として初めて合格した金秀勇さん。5回の受験を経て、この春から念願の常勤講師（教諭同等待遇）となった。臨時講師として勤務していた生駒市立鹿ノ台小学校に、偶然にも配置され引き続き勤務し、今度は常勤講師として教壇に立つ。今や「（金先生は）優秀な先生」と校長先生からの信頼も厚い。そんな金さんに話を聞いた。

素晴らしい先生方との出会い

教員をめざしたきっかけは。

小学校の5・6年の担任の先生が面白い人で、学校が大好きでした。「こんな先生になりたいな」と思って学校の先生を漠然と目指し始めました。中学3年の時の担任の先生や、高校時代の世界史の先生、書ききれない程の素晴らしい先生方との出会いがあったと思います。教師に対してのイメージが良かったので、ずっと夢としてぶれなかったのかもしれません。

奈良教育大学で学ぼうと思われたのは。

奈良で育ったので、奈良で先生になりたいと思いました。それならと思い奈良教育大学を選択しました。奈良教育大学は若草山や東大寺、奈良公園など自然と文化遺産に囲まれ、本当に環境が良く、大学に入学してから改めて奈良が大好きになりました。

在学中は、何を学ばれていたのですか。

社会科で法学を専攻していました。とは言え、現在の副学長の佐野誠先生の下で、「法」だけに捉われずに自由な学びをさせてもらっていました。やはり、在日外国人の問題に興味があったので、卒業論文では在日外国人の参政権について研究しました。

一所懸命にやってこそ、一所懸命の大切さを伝えられる

在学中は、どんな学生でしたか。

4年間サッカー部に所属して、部活中心の生活をずっとしていました。好きなサッカーに真剣に打ち込めたことは、今でも大きなバックボーンになっていると思います。一所懸命にやったからこそ、今子どもたちにも一所懸命になることの大切さを伝えられると思います。

教員採用試験対策はいつごろから、どのようにされていましたか。

3回生の終わりごろに友人に急かされて始めました。当時はあまりキャリアサロンを利用していませんでした。サロンに行っても試験の危機感が募るばかりで嫌だなって思っていました。体育や音楽の対策プログラムは受けていましたが、「みんなが受けてるから」といった感覚で受けていました。「何となく受かればラッキー」なんていう甘い感覚で受験していたので、落ちて当然だったと思います。

「今」を充実させられる人は、
きっと子どもたちの前でも
ステキな先生だと思います。

痛い目を見てやっと目が覚めたという感じでした。

大学を卒業してからは月刊の参考書を利用して勉強していました。基本的には問題を解いて、問題に慣れていく方法が自分には合っていましたので。時間がかかりますが、重要な答申や文部科学白書は印刷して読んだり、必要なところはノートにまとめておきました。答申を読むのは手間で、参考書などのまとめたものに頼りがちになってしまうと思います。でも、自分で読んで自分なりの答申の解釈をしておいた方が、答申の内容が頭に入りやすいと思います。

教員採用試験は自分と対話するチャンス

受験勉強を通じて感じたことはありますか。

受験に失敗する度に、自分を否定されたようで本当に落ち込みました。「あの子は受かっているのに、どうして自分はダメなんだろうか。」という考えが、どうしても頭をよぎってしまいました。

でも、何度も受験を重ねる内に、教員採用試験というものは、誰かと競争するための試験ではないと考えるようになりました。受験勉強や試験を通して自分を見つめ直す良い機会だと考えると、何度もその機会を得られた自分は、一回で合格した人よりもラッキーかもしれません。

これを読まれる方も、単に合格・不合格に分けられる試験だと考えず、「どうして教師になりたいのか」、「自分の持っている可能性」など、社会に出る前の自分と対話できるチャンスとして捉えてもらえればいいのでは、と思います。

ここまでやる自分を放っておく訳がない

卒業後、臨時講師として小学校に勤務されながら、大学のキャリアサロン（面接対策）を利用され受験対策をされていたと伺いましたが。

キャリアサロンを利用して本当に良かったと思います。5回目の受験で、できることは何でもやろうと考えて、大学にもう一度相談することにしました。それまでは自分の主観でしか受験対策ができていなかったので、客観的に自分を見つめ直してから受験対策ができる環境が欲しかったのが理由です。現役の大学生と一緒に模擬授業や模擬面接をすることに、少しの照れくささもありましたが、「ここまでやる自分を奈良県が放っておく訳がない。」と開き直れたと思います。具体的には、面接や論作文に客観的な意見を言ってもらえたことで、自分のやってきたことが間違いではない、と自信を持てたことが大きかったと思います。

現在のお仕事についてお聞かせ下さい。

現在は生駒市立鹿ノ台小学校で3年生の担任をしています。初任者ではありますが、臨時講師の時を含めると現任校は5年目ということで、教師としての視野も広がり、仕事の面白みが増してきていると感じています。

笑顔は楽しい居場所作りの柱

子どもたちと接する中で一番気にかけている点は。

笑顔ですね。子どもたちが笑顔で語りかけてくれた時、発信してきてくれた時に、負けないぐらいのイキイキした笑顔を返すように心がけています。いつでも笑っていられるわけではありませんが、笑顔は、「子どもたち一人ひとりにとっての楽しい居場所」を作るための柱だと思っています。子どもたちもニコニコしている担任の先生の方がうれしいと思いますし。笑顔からのコミュニケーションで、学級が安心して過ごせる場所であり続けられるように心がけています。

教師として一番やりがいを感じるときはどんなときですか。

具体的に何かが達成できたからやりがいを感じるということはあまりありません。ただ、子どもたちの大きな成長を日々間近に見ることができることは、この仕事ならではの喜びだと思います。毎日の中ではあまり気付きませんが、三ヶ月、半年、一年というスパンで見てみた時に、子どもたちは心身ともに大きなのびしろを見せてくれます。放っておいても子どもは育ちますが、そこに教師の働きかけを入れることで、より伸びていってくれるとこれ程おもしろいことはありません。また、「次はこの方法はどうだろうか。」と試行錯誤を繰り返しても、子どもたちがあっさりそれを上回っていってしまうことも、おもしろみだと思います。

今後どのような教員になっていこうとお考えですか。

子どもと共に歩むことができる教師であり続けたいと思います。一人ひとりの子どもに個性があり、私にも個性があります。互いに尊重しながら、一緒に悩んだり笑ったりできる身近な先生でありたいと思います。

「今」を充実させられる人＝ステキな先生

最後に教員をめざす後輩たちにメッセージをお願いします。

教師になろうと目指すみなさんには、必ず教員採用試験が待っています。今から不安を感じている人もいるかもしれません。私は4回試験に失敗しましたが、何とか教師をやっています。どんな失敗をしても、教師になりたいという想いがあれば子どもたちの前に立つことはできるはずです。

今は大学生活を大切にして、たくさんの失敗や経験を積んでください。くだらないことやムダなことにも時間を費やしてみてください。友だちとたくさん遊んでたくさん話をしてください。「今」を充実させられる人は、きっと子どもたちの前でもステキな先生だと思います。子どもたちはそんな先生が大好きです。

キラリ☆奈教生

第84回国展 千野賞受賞！ 彫刻を通じ空洞の果てなき魅力に迫る!!

山下圭介さん

大学院 教育学研究科 修士課程
教科教育専攻 美術教育専修 2回生
香川県立坂出高校出身

緑に囲まれた大学キャンパスに吊り上げリフトなどの重機が設置された一角がある。そこが彫塑実習室だ。そこではいわゆる「つなぎ」と呼ばれる作業服を来た美術科の学生が一心不乱に木くずを浴びながら制作作業に打ち込む。そこで誕生した山下さん制作の彫刻作品「ヒューマン・コミュ」が、第84回国展彫刻部「千野賞」（受賞者1名）に輝いた。感性を研ぎ澄まし山下さんが作品を通して伝えようとした思いは何だったのか、話を聞いた。

受賞作品について聞かせください。

自分は「空洞表現」というものを研究しています。この作品にも穴があいているのですが、例えば何もない白壁を眺めたときにどこを見ていいのか視点が定まらないですよね。でも例えばどこかに穴が一つあればそこを見てしまう。つまり視点が集中するんです。こんな風に作品の中にある「空洞」がもつ意味（効果）を定義づけるのが研究テーマです。

この作品のタイトルは「ヒューマン・コミュ」つまり人間とコミュニケーションをとるという意味です。例えばこの作品にある穴を誰かが覗いて他の誰かと目があったりするという原始的なコミュニケーションという意味もあれば、先ほどの「空洞表現」の効果であったように、作者である自分が作った穴で見る人の視点を集中させる、作者と見る側とのつなげるという意味がこのタイトルにはあります。

もう一点、今回新たに挑戦したのが、「空洞」と「隙間」が共存できるのかということです。この作品は、木材を分割し隙間をつくり真鍮でつないでみました。

今までの作品には「空洞」だけしか作らず、視点の集中を「空洞」だけで勝負していたのですが、これを「隙間」も使って見る人の視点に幅を持たせました。

でも、視点が色々なところに動いてしまうということもあり、「空洞」と「隙間」が共存できるのかということも知りたいと思っています。

もちろん自由に見てもらって、ただ穴をのぞいてもらうだけでいいんです。作品を見て「なんかよくわからんけどいいな」と言われることが一番うれしく感じます。美術作品というのは、言葉で説明できなくて当然なので。それだけ作品と自分が同じ立場にいれるというか…わざわざ紙に描き起こさなくてもストレートに表現できるというおもしろさがありますね。

プロフィール

香川県出身
奈良教育大学教育学部身体・表現コース美術教育専修卒業
大学院教育学研究科修士課程美術教育専修在籍
奈良市展、奈良県展など多数入選
2009年第83回国展入選
同年、関西国展関西国画賞受賞

個展など

平成23年3月予定 ‥‥ GALLERY ARTISLONG（京都市中京区三条通堀川西入ル一筋目角）
常　設 ‥‥‥‥‥‥‥‥ cafe　FLUKE（近鉄奈良駅前　東向商店街内　奈良市東向中町10）

「空洞」に人目が惹きつけられるというのは非常に興味深いですね。

はい。実は、始めは「ここに穴があったらかっこいいな」という単純な考えから作品に「穴」をつくっていたのですが、学部の卒業展のときに、子どもたちが自分の作品に空いた穴を覗きこんでいたとき、この「空洞表現」の効果に気づきました。

イギリスの有名な彫刻家にヘンリー・ムーアやバーバラ・ヘップワースという人がいます。美術科の僕らからしたら大先輩のような人ですが、彼らの作品にも空洞（穴）がある んです。そういう空洞の効果を知って理論的作ったのか、知らず知らずに感覚で作品に盛り込んだのかはわかりませんが。いまでも彼らの作品には影響を受けています。

高校生の頃から美術をやっていたのですか。

高校の頃から美術部で絵を描いていたのかとよく聞かれるんですが全くそんなことはないです。文系コースで、バスケットボール部で体を動かしていました。

でも、文系コースなのに数学と美術が得意だったんです。それで高校2年生の終わり頃、進路を考えたときに、中学校時代に短期間教えてもらった非常勤の美術の先生がすごく熱い人で印象に残っていて、自分も美術の先生になりたいなと思ったんです。それで実技試験のために、画塾に通いだしました。それが本格的に美術を始めたきっかけです。

彫刻のおもしろさは何ですか。

平面では、自分の中にあるもの（思っていること）を2次元に収めないといけない。でも彫刻の場合は、自分と同じ世界にそれをポッと置けばそれだけで存在感がでるんです。それだけ作品と自分が同じ立場にいれるというか…わざわざ紙に描き起こさなくてもストレートに表現できるというおもしろさがありますね。

美術を通じて一番学んだこと得たことは

言葉にできないことを専門にしている分野なんですが、それを作品でカバーしていると思います。自分も自分自身を言葉では説明するのは苦手なんですが、作品だと表現できるというかそんな表現方法を学んだ気がします。今までは、作品も身近な人に見てほしいと思っていましたが、今は自分という人間を知らない人に作品だけを見て感じたことを聞かせてほしいと思うようになってきました。

奈良教育大学大学院に進まれた理由は

3回生のとき経験した教育実習での出来事が大きく影響していますね。

美術の時間で紙粘土を使って握りこぶしを作るという課題を生徒に出したのですが、はじめ四角柱を作ってヘラで削って握りこぶしの形にしていくことを教えたのですが、ある生徒が紙粘土を手形に切り抜いて、その指の部分を折り曲げて握りこぶしを作ったんです。その発想は、とてもうれしかったのですが、自分は四角柱を作るやり方でやってもらいたくて説明しようとしたのですが、これがうまくいかない。なぜこういう風にやるのかなど今まで自分が専門としてやってきたことをうまく説明できなかったんです。そのことで、自分が専門的に学んでやってきたことを説明できないようでは、まだまだ先生になることなんてできないと思ってしまったんです。もちろん、大学院に行ったからすべてがわかるということでないですが、今もまだ学ぶことが多いです。大学院にはいってから余計に、教員になってからも生徒とともに学んでいかないといけないということを強く思うようになりました。

今後の目標は

作品でいえば、やっぱり作品の解説をしなくても感じてもらえるような作品を作りたい。そして美術に関心のない人に自分の作品を好きになってほしい。

個人的には、博士課程に進んで大学などで美術の教員になる人に美術を教えたいと思っています。将来先生になったとしても作品を作り続けることが大切だということを伝えていきたいと思います。

最後に読者へひとこと

もっと作家との距離が近づいてほしいと考えています。多くの人に作品を生で見て感じてほしい。言葉にできなくても、感覚で感じてもらってもいい。どう見てもらっても自由です。みなさんの感想を聞いて自分（作家）も気付かされることが多いのでぜひギャラリー、美術館などに足を運んでみてください。

男子サッカー部はファミリー

学校教育教員養成課程 身体・表現コース 4回生
男子サッカー部主将　福嶋 亮輔
（大阪府立豊中高校出身）

私たち男子サッカー部は、4回生9人、3回生5人、2回生1人、1回生4人のプレーヤーと、4回生1人、3回生2人、2回生1人、1回生3人のマネージャーで現在活動しています。私たちには監督やコーチがいません。しかし、それを長所に変えながら、チーム全員で協力し、火・水・金・土と週4日練習に励んでいます。目標は「2部昇格」です。いつも3部の上位に入りながらも、2部昇格をかけた試合で敗退し、悔しい思いをしています。この悔しさを忘れずに日々全員で取り組んでいる部活です。

男子サッカー部の行事としては、夏休みに行う合宿、大学祭に出店するラーメン屋、センター試験休みの時に行う男女サッカー部による3泊4日クラブスキー、3月頃に学校で行う合宿とありますが、それ以外でも日々ご飯を食べに行ったり、BBQをしたり、海に行ったりと楽しいことが本当に数多くあります。4回生から1回生まで年齢の壁を越えて全員で楽しむ、それが私たち男子サッカー部の良い部分だと自負しております。

それではなぜ私たちはサッカーサークルではなく、サッカー部なのでしょうか。それはオンとオフを非常に大切にしているからです。練習は楽しいものばかりではなく、走り込んだり、筋トレをしたりと厳しいものもあります。それを全員で乗り越えた時や試合に勝った時の感動、必死に練習してきたのに試合に負けてしまった悔しさは本当に今しか感じることができないと思います。

大学に入ってまで部活かぁ…もうサッカー燃え尽きたなぁ…などと迷っている人もいるかもしれませんが、男子サッカー部に入部することを強く勧めます。なぜなら私たちの部活はサッカーだけをしているわけではないからです。サッカーを通し、仲間と共に一つの目標に向かって活動することで、人として大きく成長できます。そしてかけがえのない宝物に巡り合えます。私たちと共に成長しながら、奈良教育大学男子サッカー部の歴史を創っていきましょう。これを読んで少しでも興味を持ってくれた人は、奈良教育大学男子サッカー部ホームページ、BBSというものがありますので一度ご覧ください。お待ちしております！

最後になりましたが、受験生の皆さんへメッセージです。「自信」を持ってください。思い通りにならずに、悩み、立ち止まってしまう時が来るでしょう。それを乗り越えるためには「自信」が必要だと思います。結果にとらわれずに、自分を信じて下さい。応援しています！

部員たちと

やりたいことがやれる場

総合教育課程 文化財・書道芸術コース 3回生
漫画研究会部長　田中友貴恵
（奈良県立郡山高校出身）

私たち漫画研究会は、毎週水曜日に活動しています。この部は兼部もできるため、今年も新入部員がたくさん入り、総勢39名という大所帯になりました。主な活動は、年に4回部誌を作成することと、秋に行われる大学祭に向けて展示物を作成することです。普段の活動では絵を描いたり、好きな漫画等について自由に意見を交わしあったりしています。

漫画研究会の魅力は、部員それぞれが個性的な考えや能力を発揮し、それを漫画等の形で表現できるところです。自由な表現活動を通じて自分の思いを多くの人に知ってもらう喜びだけでなく、他の部員の作品に触れることで自分にはない発想に出会ったりします。これは大きな刺激であり、私自身、毎日が驚きの連続です。

前年度は留学生との交流もありました。漫画は留学生にとっても馴染みの深いものであったらしく、うまく言葉が通じなくても、好きな作品名やキャラクター名をきっかけとしてコミュニケーションをとることができました。その結果、相手の国の文化や考え方を身近に感じることができ、とても良い経験になったと思います。

私たちにとってこの漫画研究会は、言いたいことが言える・描きたいものが描けるような居心地のよい場所です。先輩・後輩間の仲もよく、お互いの主張を遠慮なく交わしています。普段の活動は強制ではなく参加人数もまちまちですが、イベント前になると皆一丸となって全力を尽くし、すばらしい作品を作り上げます。私はそんな皆の作品を見るのが毎回とても楽しみです。

新たな出会いや発見が待っている漫画研究会に、皆さんもよろしければ是非遊びに来てください!!

漫画研究会の仲間

活躍する奈良教育大生

◆男子ハンドボール部
・関西学生ハンドボール連盟　春リーグ
4部　得点ランキング1位
西岡　佑惟（教育学部3回生）

◆女子ソフトボール部
・第42回春季関西学生ソフトボールリーグ戦
女子3部リーグ優勝

◆弓道部
・第64回奈良市民体育大会　弓道競技
近的の部／遠的の部　女子団体 優勝

【個人成績】
・第64回 奈良市民体育大会　弓道競技
近的の部　男子個人　優勝
森　慎太郎（教育学部3回生）
遠的の部　男子個人　優勝
加納　隆成（教育学部1回生）
近的の部　女子個人　優勝
田中　美奈（教育学部3回生）
近的の部　女子個人　3位
池田　麻由（教育学部2回生）

男子ハンドボール部
西岡 佑惟

女子ソフトボール部

新連載

奈良に息づく仲間たち

自然環境教育センター長
教授　鳥居 春己

ミミズ

ミミズは環形動物貧毛綱に属し、「目見えず」が名前の由来と言われる。ミミズと聞くと皆さんの中には「エーッ、気持ち悪い」と言う方も多いことだろう。子どもには人気者なのに、皆さんはいつ頃からミミズを嫌うようになったのだろうか。彼らは土の中を動き回り、土を食べ、必要な栄養分を吸収し、粒状の糞を排泄する。そのことで、土壌を植物の生育に適した団粒状構造にするという重要な役割を担っているのである。

奈良教育大学構内では、雨上がりに土から這い出して来た多くのミミズを見ることができる。構内で捕獲されたミミズ一八六頭（※）を調査したところ、一二種のミミズが確認された。その中で最も多かったのがノラクラミミズで、写真のように肛門部分が丸いのが特徴である。ハタケミミズとヒトツモンミミズがそれに次いで多い種であった。調査が進めば新たな種も確認されると考えられる。

※学術的には「頭」で数える

自然環境教育センター　http://www.nara-edu.ac.jp/ECNE/

奈良教育大学 広報誌
第34号　平成22年7月28日　編集/広報・情報公開委員会　発行/国立大学法人奈良教育大学
〒630-8528 奈良市高畑町　TEL. 0742-27-9104　FAX. 0742-27-9141
http://www.nara-edu.ac.jp/

企画・広報室までご意見・ご感想をお寄せ下さい。
お寄せいただいた方の中から抽選で「なっきょんストラップ」を差し上げます。
【 奈良教育大学 企画・広報室 】kikaku-kouhou@nara-edu.ac.jp

なっきょん's CLUB
スタッフ募集のお知らせ

広報誌づくりなど、広報活動を手伝ってくれる学生広報スタッフを募集しています。
興味のある方は企画・広報室まで、お気軽にお問い合わせ下さい。